平成３０年度

連携活動記録報告書

ＶＯＬ．９

平成３１年２月

山形大学附属学校

目　　次

はじめに　・・・・・・1

Ⅰ　連携活動の記録

平成３０年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　・・・・・・3

平成３０年度　附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題　・・・・・・5

今年度の活動を振り返って　・・・・・・6

１　幼小中連携

（１）幼小連携　・・・・・・9

（２）幼中連携　・・・・・１５

（３）小中連携　・・・・・１８

２　特別支援学校連携　・・・・・２０

Ⅱ　山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程　・・・・・２８

Ⅲ　資料

附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める部会に関する申し合わせ　・・・・・３２

附属学校研究・連携推進委員名簿　・・・・・３４

は じ め に

平成３０年度連携活動記録報告書が出来上がりました。

山形大学附属学校園は、平成２１年４月から運営部体制となり、今年度が節目の１０年目となります。校長の専任化から１０年が経過したことにもなります。この間、文科省の指導を中心に、種々な変化が続きましたが、今年度も将来に向けた取り組みが計画されております。

その一方で政府が進め、文科省からの「学校における働き方改革に係る緊急提言」が出されて以来、勤務時間外勤務の削減が求められております。普段の授業に気を配り、子どもと向き合うのが当然で、放課後の時間で共同研究や教材研究を行なってきた従来の勤務形態から、時間外勤務を大幅に削減するにはどうすればいいのか。そのような戸惑いを払拭できないまま、削減の工夫・試行を行ないながら、これらの共同研究はなされてきました。長年、時間をかけて、じっくりと教育に携わってきた先生たちにとっては、本当に苦しい年度であったと思っています。そして、この時間の制約も今後の研究・教育の現場にとっては大きな課題となるはずですし、試行錯誤の中から出口を探すことになります。

有識者会議の中で、附属学校園については、「公私立とは異なる国立大学附属学校としての存在意義・役割・特色の明確化」「『入学者の選考―教育・研究―成果の還元』の有機的なつながりの明確化」「教職生活全体を見据えた教員研修に貢献する学校への機能強化と、校長の常勤化」が掲げられています。校長の常勤化は１０年前に実施し、入学者選考についてもよしとしても、「存在意義」「役割」「特色の明確化」そして「研究－成果の還元」は、果たしてどの程度と位置づけられるのでしょうか。特に問題となるのは、山形県における附属学校の存在意義であり、附属学校の研究がどれほど地元の教育に還元されているか、ということになるはずです。その意味で、この本書が研究の還元の一部として役立てば幸いだと考えています。

附属学校を取り巻く環境がこれほど大きく変化する中、これだけの研究活動がなされてきたのですが、果たして地域の先導的なモデルとして公立学校における教育現場に還元されうるものになっているでしょうか。また、附属学校という大学との共同研究でしか行なえないものになってはいないでしょうか。自己満足に陥っていないでしょうか。改めて厳しく検証していかなければならないと考えています。

最後に、本書について忌憚のないご意見をお寄せ頂ければ幸甚に存じます。そのご意見がまた新たな挑戦、取り組みの基となるからです。よろしくお願い申し上げる次第です。

平成３１（２０１９）年２月

山形大学附属学校運営部部長　藤田　洋治

Ⅰ　連携活動の記録

平成３０年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その１

附属小校長　佐藤昌彦

メンタルケアコーディネータ（中学校籍 教諭）　　土門　直子
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍 教諭）　髙橋　僚子

配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う

◎教育相談と特別支援教育において、校種間の連携及びその一貫性を図る。
◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。
〇附属学校園全体の心の問題を抱える幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。

主な職務

◎幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
◎該当する幼児児童生徒への直接の支援・指導
〇学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
〇各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
〇まつなみ学習支援室における支援員への専門的な助言

今年度（配置８年目）の基本的な考え方

【目　標】
・早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図ること。
・各学校園でコーディネータを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図ること。
・個に応じた支援のあり方（当該児童生徒のみならず保護者支援や担任支援も含む）を探究すること。
・年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの 12 年間継続して課題解決に向かっていくこと。
・まつなみ学習支援室の支援員を適切に活用し、別室での学習・取り出し指導の充実を図ること。

【役　割】
・附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつないでいく。
・各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導支援を行う。

【具体策】
・各校園の状況を把握し、幼児児童生徒に係る情報をつなぎ、校園間の指導支援の一貫性を担保する。
・先進的・専門手的な情報を収集し、各校園の教員に研修等を通して指導する。

今年度の成果　教育相談と特別支援教育における校種間の連携及び一貫性が強化された。
→支援の必要な幼児・児童への個別対応が充実した。
→保護者面談の継続、医療機関等との連携窓口としての機能が定着してきた。

◎コーディネータによる丁寧な幼児の実態把握がなされ、小学校進学に向けた円滑な指導の連携が図られるようになった。
◎教育相談主任等とコーディネータとの打合せを充実させたことで、見通しをもってコーディネータが助言や支援に当たることができ、児童生徒の変容までしっかりと追跡できるようになっている。
◎指導対象幼児・児童・生徒についての観察や分析、それをもとにしたアセスメントの質が向上してきた。
◎教育相談担当・養護教諭・ＳＣと連携したケース会議を状況に応じて適時開催できたことで、早期対応が的確になったり、見通しをもった支援が充実したり、組織的な対応の充実が図られた。
◎異校種教員が同僚として常にいて具体的にコーディネートしていることで、それぞれの教育観を交流することができ、教員の見方・考え方が拡充してきている。
◇コーディネータを講師とした研修等を通して、計画的な教員の資質向上が図られるようにしていきたい。

平成３０年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その２

附属小校長　佐藤昌彦

英語教育コーディネータ（附属小学校籍 教諭）　　佐藤　大将

配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

〇グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。

〇附属学校園全体の英語教育における幼児児童生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。

〇異学校種間の英語教育指導のあり方に関し、地域のモデル的取組を図る。

主な職務

◎大学教官との連携をとりながら、附属学校全体の英語教育における幼児児童生徒への支援・指導の充実に向けて、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。

〇附属学校全体の英語教育とその支援・指導を担当する教員として、幼小中一貫教育を支える。

〇大学・学部等における研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質の向上に努める。

◎小学校において外国語活動の授業において、担任と連携し学習指導やその補助を行う。

◎英語教育の充実強化・高度化に対応するための指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。

今年度（配置４年め）の基本的な考え方

【目　標】

◎現行指導要領にある外国語活動の指導充実と移行期間の年間指導計画の策定

・体制整備に向けた情報収集や資質の向上を図るための情報提供

◎附属中学校の英語科と小学校の外国語活動研の接続を視野に入れた連携

【役　割】

◎担任やALTと連携して、外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。

・県や市の研修を受けると共に、先進校の公開に参加し、その内容を伝達する。

〇附属中学校英語科の授業づくりへの支援（T.Tでの授業参加）

〇附属小学校外国語活動への附中英語科教員の参加をコーディネート

【具体策】

◎５～６学年における外国語活動（週６コマで年間２１０コマ）を担当する。

◎公開研究会において、外国語活動の授業を提案する。

・３～４学年における先行活動として、総合的な学習の時間における数時間を担当する。

◎新学習指導要領に向けた、年間指導計画を策定する。

◎研修や参観した公開授業等の情報を整理し、職員会議や校内研修会等で報告する。

◎毎月月曜日に附中英語科でのTT指導後の振り返りと打合せ。

◎３年間の成果と課題を整理し、報告書等を作成する。

今年度の成果

→ＰＤＣＡサイクルを機能させることを意識して、昨年度作成した年間指導計画による実践し、加筆修正しながら改善を進めることができた。次期学習指導要領の全面実施に向けた取組の一層の充実が図られた。

→新たなALTを採用しALT二人体制とになったことを生かし、中学年の外国語活動へのALTの配置率が上がり、コーディネータ・担任・ALTが協働で児童の実態に合った実践を行えるようになった。

→外部研修の講師を行うなど、本校の取り組みを地域に還元する機会の充実が図られた。

◇来年度は、幼小中の連携を活かした外国語教育の実効的な取組を蓄積していきたい。

平成３０年度　附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長　佐藤昌彦

設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実と体制整備の推進を図る。

〇附属学校園の特別支援教育並びにメンタルケアコーディネータの機能・活用のさらなる充実を図る。

〇県内小学校のＬＤ等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

主な職務

学級担任、各コーディネータ、ＳＣ（必要に応じて大学教員・松波相談室）と連携して主に以下の職務を行う。

〇学習面、生活面での支援（行動観察、ＴＴ指導、取り出し指導、諸検査の実施）

〇メンタル面での支援（相談、アドバイス等）

〇保護者との相談、面談

〇研修会等の啓発活動の計画・実施

支援室の運営

・室　長：小学校教育相談主任　長岡　初美教諭　（附属小学校在籍）

・副室長：特別支援教育コーディネータ　　髙橋　僚子教諭（附属特別支援学校在籍）

：メンタルケアコーディネータ　　土門　直子教諭（附属中学校在籍）

・支援員：１名・・・支援員（週５日５h 勤務）

・スーパーバイザー：佐藤　宏平氏（山形大学地域教育文化学部准教授）

今年度の成果　　**→附属学校園の特別な支援を必要とする幼児児童への支援が充実した。**

心理検査等による客観的なデータの収集・活用など、専門的な支援が可能になった。

→幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び、支援員の幼児児童への個別支援が有効に機能した。

① コーディネータの専門性を生かしたアドバイスを適時に得ることができた。

② 個別指導は指導計画に基づいて支援し、本人・保護者の有用感につながっている。

③ 附属学校園教員の特別支援教育に対する意識が高まると共に、各学級における特別支援教育力の向上につながった。

④ 来室時に限らず、教室や園に出向いてのアセスメントや支援により、支援室の学びと通常の学びのつながりを確かにすることができた。

今後に向けて

① 支援児童生徒の情報の共有化を図るため、資料の様式や保存の効果的な在り方を検討していく。

② 附属学校園教員の特別支援教育力の更なる向上をめざし、職員・保護者の研修等を計画し実施する。

③ 支援児童に対する一貫した支援ができるよう、幼・小・中の連携を強化していく。

平成３０年度の活動を振り返って

附属学校メンタルコーディネータ　　土門　直子
附属学校特別支援教育コーディネータ　髙橋　僚子

1　主な活動と報告

（1）関係者との連携について

①担任、各学校園コーディネータ等との連携

・要支援幼児、児童、生徒についての情報交換と支援について
・効果的な教材の作成や活用について
・支援記録の作成と情報共有
・ケース会議に参加しての話し合い
・要支援幼児、児童、生徒の保護者へ向けた対応について
・個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成、評価について

②養護教諭、スクールカウンセラー、スーパーバイザーとの連携

・要支援幼児、児童、生徒についての情報交換と支援について
・支援に役立つ知識や教材についての情報共有

③メンタルコーディネータ、学習支援員との連携

・幼稚園と小学校、中学校での勤務日数、日程の調整
・要支援幼児、児童、生徒についての情報交換と支援について
・支援記録の作成と情報共有

（2）教育的な支援について

①要支援幼児、児童、生徒への支援

・授業中の個に応じた学習支援
・個別学習での支援（アンガーマネジメント、SEL-8S、アサーショントレーニング等）の計画、実施
・クラス集団に向けた支援（セカンドステップ０、ソーシャルスキルトレーニング等）の計画、実施
・知能検査（WISC-Ⅳ）の実施

②活動を通しての幼児・児童・生徒理解

・各学校園の行事等（運動会、フェスティバル、校外学習、各集会等）や公開研究会への参加
・給食、休み時間等での幼児、児童との交流等

③教材教具の作成

・学習予定表、行事に向けた視覚支援教材、ソーシャルスキル教材、学習プリント、絵カード等、有効と思われる教材教具の作成

（3）保護者からの相談対応

・相談内容は、落ち着きが無い、対人トラブル、不登校、身の回りの整理整頓、家庭での対応の仕方、就学について等

・担任等と同席しての面談、連絡帳のやり取り等での対応

（４）附属学校園間の連携
・幼小連絡会、小中連絡会への参加
・交流及び共同学習での幼児、児童、生徒の様子観察と支援
・個別の教育支援計画、個別の指導計画の様式の修正、引き継ぎ

２　今年度の成果（○）と次年度以降に向けて（△）
（１）関係者との連携
○支援の必要な幼児、児童に関わる担任等と情報を共有しながら、具体的な支援の方法について提案したり、教材を紹介したりしながら一緒に検討を行った。また、支援の経過を随時確認し、継続的な支援ができるようにした。
○関係者と顔を合わせる時間が限られていたため、支援を行った児童についての記録を毎時間作成し回覧することで、児童の変容や支援に対する考え等を伝え共通理解を図った。
△個別の教育支援計画、個別の指導計画の計画的な作成や活用については、学校園のコーディネータと再度検討していく。また、個別の教育支援計画への記入を含め、合理的配慮について周知できるようにしていく。
△スーパーバイザー（大学教員）より更にご協力をいただきながら、より効果的な支援で様々なケースに対応できるようにしていく。

（２）教育的な支援
○個別の支援、集団に向けた支援等、実態に応じて支援の内容や方法を検討しながら実施した。
△人との関わりの面で課題となる幼児、児童が目立った。円滑な人間関係の形成に向けた支援の方法について更に研修を深めながらより的確な情報提供をし、効果的な支援ができるようにしていく。
△不登校等、心理面で課題の大きい児童への支援については、スクールカウンセラー、養護教諭等と随時相談しながら対応していく。

（３）保護者への対応
○依頼を受けて担任等とともに面談に同席したり、連絡帳で個別にやり取りしたりしながら相談を受けるケースもあった。面談や相談の前に担任等と打合せを行い、対策を考えた上で実施できた。

（４）附属学校園間の連携
△支援の必要な幼児、児童、生徒のより良い支援の継続と充実を図るために、個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用していく。

今年度の活動を振り返って

附属学校英語教育コーディネータ　　佐藤　大将

１　今年度の活動の報告

（１）山形大学附属小学校において

①第５・６学年における外国語科の授業・・・年間７０時間×６クラス

年間指導計画のもと、「外国語を通じて、自らかかわりながら相手や他者とつながろうとする子ども」を目指し、第５・６学年各３クラスの外国語科の授業づくりと実践に取り組んだ。「We Can!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を充実させ、「書く」「読む」活動についても様々な可能性を模索しながら学習を進めてきた。「クラスの友だち紹介」「夏の思い出アルバム作り」「山形市内や校内の道案内」など、児童が自分事の課題として取り組むことができるような授業づくり・単元づくりに取り組んできた。

②第３・４学年における外国語活動の授業・・・年間３５時間×７クラス

年間指導計画のもと、「Let's Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。あいさつ、自己紹介から始まり、数、色、食べ物、曜日、時刻など、身の回りのものを題材にコミュニケーション活動を行ってきた。歌やチャンツ、ゲームなどを楽しみながら外国語に慣れ親しむだけでなく、自分の思いや様々な情報を互いに伝え合うような、意味のあるやりとりを大切にした授業づくり・単元づくりに取り組んできた。

③ＡＬＴとの連携

ポール・プライス先生（年間３６時間）に加え、今年度からは新しく奥山ヒラリー先生(年間１８２時間)を迎え、２名の ALT と連携しながら授業づくりを行ってきた。児童は、２人が話す英語（アメリカ英語とニュージーランド英語）を比較することで国や地域によって発音が違うことに気付いたり、それぞれの国の文化について話を聞いて日本と比べたりして、英語の持つ音（文字と綴りの関係）についてより専門的な学習をすることができた。

③研究会における授業提案

６月の学習指導研究協議会では、第５学年外国語科「できることを紹介し合おう」、１１月の教科領域等研究協議会では、第３学年外国語活動「カードを送ろう」の授業を提案した。授業での子どもの姿をもとに、県内の様々な先生方と今後の外国語教育の方向性について有意義な話し合いを行うことができた。また、９月に行った校内研では、第６学年外国語科「夏の思い出を紹介しよう」の提案授業を行い、共同研究者やコメンテーターの先生方もお招きし、全職員で外国語科の授業について話し合いを行った。

④親子わくわくワークショップの開催

７月には、校内外の親子を対象とした「英語の絵本の読み聞かせ」をテーマとしたワークショップを行った。本校 ALT のヒラリー先生と共に、英語の絵本の紹介や読み聞かせを行ったり、普段の授業で扱うような歌やゲームを織り交ぜたりしながら、親子で英語を楽しむことができた。

（２）山形大学附属中学校において

中学校英語科の授業研究会への参加

第１・２・３学年の英語科の授業研究会に参加し、小学校外国語活動・外国語科と中学校英語科との学びの連続性について研修を深めた。中学校での授業の実際を知り、情報交換をすることで、小学校として取り組んでいくべきことが明確になり、今後の見通しをもつことができた。

２　今年度の成果（○）と来年度向けた課題（△）

○　２人の ALT と共に、新学習指導要領完全実施に向けた授業づくり・単元づくりに取り組み、「聞く」「話す」「書く」「読む」活動の充実を図ることができた。

△　来年度は、コーディネータが中学校に行って一緒に授業を行ったり、逆に中学校の英語科教員が小学校の授業に参加したりと、小中連携に向けた取り組みを進めていく。また、小・中それぞれが作成した「CAN-DO リスト」を照らし合わせながら、「附属小中 CAN-DO リスト」を作成する。

幼小連絡会

（1）ねらい

・新１年生の学習や生活の様子の参観を通して、各児童の検討していきたい面や今後の課題について共通理解を図りながら、見通しをもつことができるようにする。

（2）計　画

期　日	場所	窓口	内　　容	附小担当	附幼担当
５月１５日	附小	附小	**第１回幼小連絡会**（附幼・一般） １年生の児童の学習の様子を幼稚園教員が参観し、その後全体で話し合いをして情報交換をする。	教務 教頭	教務
１１月２１日	附幼	附幼	**第２回幼小連絡会** 小学校教員（１年担任・校長・教頭・教務・教務副・養護教諭）が幼稚園児の活動を参観し、それらをもとに幼小の学びや育ちについて共通理解を図る。	教務 教頭	教務
１２月１３日	附小	附小	１年生のフェスティバルに年長児を招待し、参観してもらう。	井上	伊藤
１月１７日	附小	附小	年長児が小学校に来校し、１年生の手伝いのもと、給食を一緒に食べる交流会を行う。	井上	伊藤
２月　５日	附小	附小	**第３回幼小連絡会** １年生並びに年長児に関わりある幼稚園担当が小学校１学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務 教頭	教務
２月１３日	附小	附小	生活科などの１年生の学習の様子を見学したり、一緒に活動に参加したりする。	１年担任	伊藤
２月２０日	附小	附小	**新入児情報交換会**（一般） 一般園の年長児に関わりある教員が１学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務	なし

※　太枠は、附属連携に関するもの

（３）附属連携の観点から

附幼との交流を通して、小１プロブレムなどの問題に対応したカリキュラムづくり及び子どもの情報の共有などを図りながら、子どものよりよい育ちのために関係強化を図った。

①附幼参観…（小：教員）附幼の保育参観を通して、幼稚園での子どもの育ちへの関わりを理解し、小学校生活に活かすことができた。

②学習体験・給食交流会…（幼）附属小学校の生活の一端を経験してもらい、小学校の活動への見通しをもつことができた。

（小）一緒に学習や給食準備を行いながら、自分たちの経験を伝えることで、自分の成長をふりかえることができた。

③フェスティバル参加…（幼）１年生のフェスティバルの様子を参観し、来年の自分の姿としてイメージをふくらませることができた。

（小）附幼園児に見学をしてもらうことで、上の学年としての自覚が芽生え、自信をもって取り組む姿が見られた。

（４）情報交換の観点から

第１回目の幼小連絡会および新入児情報交換会で附幼以外の幼稚園、保育園の方からも参観をいただき、こちら側の気になる点や引き続き見てもらいたい点など交流を行い、子どもの育ちに活かす会にすることができた。

①第１回の内容

○期　日　　５月１５日（火）

○参　観　　・附幼　…　１～３校時（８：５５～１１：３０）
　　・他幼、保育園　…　４校時（１２：３５～１３：２０）

○話し合い　　・附幼　…　１６：００～１７：００（校長室）
　　・他幼、保育園　…　１４：００～１５：００（会議室）

○内　容　　・新１年生の様子について（情報交換など）
　　・今後の幼小連携について

（他幼、保育園の場合）

１年主任から子どもの様子について伝え、参観した幼稚園、保育園の方から感想をいただき、気になる児童の幼稚園、保育園の方に残ってもらい情報交換をした。

第2回 幼小連絡会

１　ねらい　　幼児期の育ちと保育者の援助について理解し合い、幼小のつながりを考える。
２　日　時　　平成３０年１１月２１日（水）保育参観、協議会
３　参加者　　小学校・・・高橋教頭・１の１担任井上教諭・１の２担任青山教諭
　　１の３担任神保教諭・鈴木養護教諭
　　幼稚園・・・村上園長・５歳児担任伊藤（真）教諭・４歳児担任那須教諭
　　・３歳児担任倉岡教諭・３歳児担任片山教諭
　　・奥山養護教諭（６名）
　　特別支援コーディネータ・髙橋教諭

４ 内　容　　（１）　幼稚園の保育参観（５歳児中心）　　(9:00～13:30 に適宜)
　　（２）　協議会　（15：45～17：00）　　幼稚園おはなしルーム
　　・５歳児後期の教育について
　　・本日の保育参観より（小学校の先生方撮影による写真をもとに）
　　・幼小連携の充実にむけて（今後の幼小連携の予定と確認）

話し合いの様子（一部抜粋）

・園庭でのおうち遊びで、チャイムをどうやってつけるのか友達と話し合いながらすすめていた。遊びの中で意見を出し合いながらやりたいことを実現させていく姿が印象に残った。
・片付け前にテラスに戻ってしまった子ども達も、片付けが済んでないことに気付き戻ってくる場面があった。自分達で片付けができていることに感心した。
　→片付けのコツや片付け易い環境をつくるなど、くり返しの指導が必要である。
・フェスティバルに向けての話し合いで、意見の行き違いがある場面では、保育者が二人での解決を促すように声掛けし、子ども達の自己決定する機会を大切にしていた。
・バランスよく食べやすいような弁当が多く見られた。給食では好きなものだけが食べられるわけではないので、幼稚園での様子とはまた変わってくると思われる。食が細く食べるのに苦労している子どももいるが、給食を通して食べられるようになった食材があり喜んでいる子どももいる。
・特別支援コーディネータの髙橋教諭に幼小両方を見ていただき、幼稚園の保護者に対しても就学前までの子育てのアドバイスや心構え等をご指導いただき助かっている。

５　まとめ

今年度も保育参加していただく小学校の先生方に、参観中に印象に残った子ども達の姿を写真に撮っていただきそれをもとに話し合いを進めることができた。アプローチカリキュラムの見直しや充実に努め、小学校スタートカリキュラムと合わせて相互理解しながら、附属学校ならではの連携を深めていきたい。

とちのき学年とのフェスティバル・給食交流会・交流学習について

1　ねらい　（幼）・小学校を訪問し、１年生との交流を通して小学校生活の期待をもつ。
　　・交流で１年生とのかかわりをもち、入学後の生活や学習に対する期待を高める。

2　日時・場所　（１）平成３０年１２月１３日（木）　附属小学校　10:55～11:30
　　（２）平成３１年　１月１７日（木）　附属小学校　11:00～13:00
　　（３）平成３１年　２月１３日（水）　附属小学校　10:50～11:50

3　参加者　　年長児さくら組　３３名　　引率：園長、伊藤（真）、安彦

4　活動内容

（１）とちのきフェスティバル

幼稚園最後のフェスティバルを終えたばかりの年長児は達成感と共に寂しさも感じていたが、とちのきフェスティバルの参観を通して、「小学校でもフェスティバルがあるんだ！」と目を輝かせていた。広い体育館いっぱいに広がる１年生の演技に、憧れを抱く姿が見られた。

（２）給食交流会

年長児が３つのグループに分かれ１年生の各学級に入り交流を行った。すごろくで一緒に遊んでもらったり、校内を案内してもらったりして同じグループになった１年生と仲よくなった。給食の盛り付けや食べ方などを丁寧に教えてもらい、１ 年生の温かい歓迎ぶりに年長児の小学校への期待感も高まった様子であった。

「１年生とごあいさつ
ドキドキするな」

「給食の準備の仕方を教えてくれたよ。
１年生ってやさしいな」

（３）授業参観・交流活動

難しそうなだなぁ～
１年生ってすごいな

『お買いものチケット』だって。
何が買えるのかな？」

ぼくの大好きな虫だ！
これ、買っていいの？

すごろくのやりかた
教えてね！

５　まとめ

感染症の発症が心配される時期ではあるが、小学校の先生方のご尽力のおかげで予定通り３回の交流会をもつことができた。小学校側で年長児を受け入れるにあたって、各グループに誰を迎え入れるのか事前に決定し、その年長児の名前を入れての招待状を準備してもらったことで、園児一人一人が迎え入れられる喜びをもって交流会に参加することにつながった。

学校中を探検したり、すごろくやお店屋さんごっこをしたり、年長児の育ちにあった授業や交流内容にしていただき、１年生との距離も縮まりたっぷり触れ合うことができた。年長児はさらに小学校入学への期待を膨らませていた。

園に戻ってからも、「体育館を走ったんだよ」「〇〇ちゃん、やさしかったよ」と交流会や１年生の姿を思い出し、１年生の生活に期待をもつことができた。

附属幼稚園年長児との交流活動【附属小学校】

１　ねらい

（１）　附属幼稚園の年長児との交流活動を通して、年長児の気持ちを考えながら行動し、今年１年間の自分の成長を見つめることができるようにする。

（２）　特定の年長児とのかかわりを通して、次年度のなかよしペアでの活動に対する期待を高めたり、具体的なかかわりの見通しをもったりすることができるようにする。

２　日時

（１）　平成３０年１２月１３日（木）　　フェスティバル参観

（２）　平成３１年　１月１７日（木）　　交流活動・給食交流

（３）　平成３１年　２月１３日（水）　　学習参観・交流活動

３　活動の実際

（１）　フェスティバル参観

フェスティバルへの招待メッセージを、ビデオレターで年長児へ贈った。当日のとちのきフェスティバルでは、「３びきのかわいいオオカミ」の劇を体育館の一番前で見てもらった。数日後、年長児の感想が届いた。

（２）　交流活動・給食交流

年長児１人に対し１年生３人というグループを作り、交流活動を行った。（１組：福笑いとすごろく、２・３組：学校探検）その後、一緒に給食を食べた。配膳や後片付けの仕方などを年長児に教えたり、年長児に自分から話しかけたりする姿が見られた。数日後、年長児からお礼のメッセージが届いた。

（３）　学習参観・交流活動

事前に、年長児一人一人への招待状を作成して届けた。当日、年長児は国語・算数・生活の学習の様子を５分くらいずつ参観した。その後、１月１７日と同じ学級に入って交流活動を行った。（１組：学校探検、２・３組：お店屋さんごっこ）１月の交流活動のときよりも、年長児と１年生の会話が増えた。

４　交流活動を振り返って

普段、小学校では一番年下という立場で生活している１年生だが、交流活動の際は、少しお兄さん・お姉さんになった気分で、年長児にかかわることができた。

フェスティバルでは、直接のやりとりはなかったが、年長児の存在は、１年生の子どもたちの「かっこいいところを見せたい。」というやる気を奮い立たせた。「声が大きくてすごかった。」「フェスティバルが楽しくて、わたしたちもやりたくなったよ。」などの感想が年長児から届き、子どもたちの達成感はさらに大きくなったと思われる。

１回目の交流活動では、互いに初めて会うので、はじめはどのグループも少し緊張している様子であった。しかし、福笑いやすごろく、学校探検を一緒に楽しんでいるうちに、徐々に会話が増えていき、笑顔が見られるようになった。給食交流では、「おいしい？」「好きな食べ物は何？」「がんばって食べたね。」など、自分たちから年長児にかかわろうとしていた。年長児の気持ちを考えて行動しようとする姿がたくさん見られた。

２回目の交流活動では、小学校の学習を興味津々で見つめる年長児の姿が見られた。また、学校探検で年長児におすすめの場所を教えたり、お店屋さんになって年長児に品物を売ったりする１年生の子どもたちもとても意気揚々としていた。

どの交流活動を振り返っても、年長児にかかわる１年生の子どもたちからは頼もしさが感じられた。「お兄さん・お姉さん」という立場になることで、相手のことを思って行動しようとする気持ちが高まったのだろう。また、そんなふうにできる自分を誇らしく感じている様子も見られた。年長児にとっても、小学校生活への期待が膨らんだのではないかと思う。４月からは「なかよしペア」としてかかわることになる。２年生になった子どもたちがどんな姿を見せるのかとても楽しみである。

【幼中連携：中学校運動会】

幼稚園児による中学校運動会参観

1　ねらい（幼）　・年中児が年少児をリードしながら活動し、互いに親しみをもつようになる。
　　・中学生のお兄さんお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。

2　日時・場所　平成３０年７月６日（金）　10:30～11:00　附属中学校グラウンド

3　参加者　　年少児うめ・もも組３２名　年中児りんご組３４名
　　引率：那須・倉岡・片山・金山・五十嵐

4　内　容　　中学校まで年中少ペアになって徒歩で往復し、運動会の様子を見て、応援した。

5　まとめ

園外での活動が初めてとなる年少児に、これまでの園外活動の経験や運動会応援の経験のある年中児達が、「ここは小学校だよ」「もうすぐだからね」などと、優しく声を掛けながら手をつないで道案内しながら出かけた。

中学校に到着した子ども達は、中学生や保護者のみなさんに温かく迎えていただき応援に対する意欲が一層高まった様子だった。特に、リレー競技は子ども達にも大変わかりやすく、中学生の走りの速さや迫力に心動かされたようで、大きな声を出して応援しながら最後まで見入っていた。中学生の存在を感じる交流のきっかけとなった。

【幼中連携：幼稚園運動会】

中学生の幼稚園運動会手伝い

1　ねらい　（幼）　中学生のお兄さんお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
　　（中）　幼稚園運動会のボランティアを通して、幼児とのかかわりを学び主体的に運営を手伝う。

2　日時・場所　平成３０年９月１５日（土）8:30～12:00　　附属幼稚園

3　参加者　　ボランティア希望の３年生９名、２年生１名、１年生１名　　計１１名
　　音楽主任　渋谷教諭

4　内　容　　□和太鼓演奏 □園児誘導・世話 □競技の試技・補助 □道具等の準備・片付け

～運動会の様子～

Taiko fanfare ＭＡＴＵＲＩ
太鼓の音で、元気がわいてきたよ！
「雨に負けないぞ～！」

優しく励ましてくれてありがとう！

各学年の競技のなかで、
競技のお手伝いや試走をしてくれるなど
大活躍の中学生でした！

～参加した生徒の感想～

附属幼稚園のボランティアを体験してみて、幼い子どもと接する難しさを感じました。テントで応援している子、けんかを始めた子、テントから走り出す子の様子に戸惑い、初めは何もすることができず、戸惑ってしまいました。先生方や保護者の方々の接し方でスムーズに子供たちが動いているのを見て、私もそのようになりたいと思いました。　**三年　阿部　汐里**

とても貴重な体験をたくさんさせて頂いたと感じています。普段の生活で園児と関わる機会がなかった私にとって、幼児と触れ合う楽しさ、大変さを知ることができたことは、自分の力を高めることにつながったと感じています。雨天のため、プログラムを全部できなかったことは残念ですが、楽しい運動会を一緒に作りあげることができて良かったです。　**三年　上野　芽衣**

年少組を担当させていただきました。トイレに連れて行ったり、話し相手になってあげたりするのはとても大変で、幼稚園の先生方がいかに苦労されているかわかりました。しかし、笑顔で接していると、園児が私を「先生、先生」と呼んでくれたことがとても嬉しかったです。一緒に運動会をすることができて楽しかったです。ありがとうございました。　**三年　堀川　真那**

附属幼稚園との交流学習

1　活動のねらい

・交流を通して、幼児に親しみを持ち、ふれ合いの楽しさを感じることができる。
・幼児の生活や心身の発達などについて気がついたり学んだりすることができる。

2　交流日　　平成 30 年 7 月 3 日（火）3 年 4 組　　7 月 10 日（火）3 年 2 組
　　7 月 11 日（水）3 年 1 組　　11 月 19 日（月）3 年 3 組

3　参加生徒　　附属中学校　第 3 学年　136 名

4　活動内容について

・幼稚園の４クラスに男女１０名前後に分けて入り、園児が自ら行っている外あそびに３０分ほど参加した。
・春の授業から幼児の体や運動機能、情緒の発達などについて学習を進め、再確認する場を交流会とした。実際にふれ合うことを想定して、限られた時間（３０分）の中で、なるべく早く遊びに入り、交流できるよう、話しかけの方法や姿勢、注意すべき点などを具体的に考え、工夫して臨むことを大切にした。

5　交流を通して　～生徒の感想より抜粋～

・幼児とのふれ合い体験をして、幼児と遊んだり、話したりする時は、幼児の目線と高さを合わせることが大切だと思いました。そして、たくさん話しかけることが大切だと思いました。「何してるの？」や「何つくってるの？」などの質問をすると、幼児も話しやすいことがわかりました。

6　まとめ

幼児とのふれ合いに積極的に活動し、短時間で深いふれ合いの時間をつくることができた。姿勢を低くして、目線を幼児に合わせて笑顔で話をしたり、幼児のペースに合わせて行動したりすることができていた。

幼児と実際にふれ合うことを体験することで、学習した内容について理解を深めることができた。また、幼児が楽しく遊ぶために、自分自身が笑顔で明るく楽しい雰囲気をつくることも効果的だと気づいた人が多かった。

附属小学校と附属中学校の合唱交流学習について

音楽担当　長岡

１　ねらい

音楽を通して、附属の小・中学生がともに過ごすことで、つながりを感じたり、互いの様子を理解したりすることができるようにする。

２　日　時　　平成３０年１１月１３日（火）　５校時

３　当日の動き

１３：２０～１３：４０	声出し（中学校体育館）
１３：５０	体育館集合完了
１３：５５	交流学習開始
１４：２０	交流学習終了・片付け 小学生は小学校へ移動

会の流れ

全体進行（中学生）

１．開会のことば（中学生）

２．中学校２学年合唱コンクール優秀賞
　クラス合唱発表　曲目『時の旅人』

３．中学校２学年
　　学年合唱発表　　曲目『信じる』

４．小中合同合唱　　曲目『翼をください』
　　曲目『変わらないもの』

５．感想発表（小：大瀧　皓子　　中：　　）

６．閉会の言葉（中学生）

※今年度は、インフルエンザ感染予防のため、計画のみで実施しなかった。

「小中合唱交流会」

1. ねらい：音楽を通して、附属の小中学生がともに過ごすことで、つながりを感じたり
お互いの様子を理解したりする。
2. 目　標

附中生の目標

来年ともに生活する後輩に、歌を通してメッセージを送ることで、よりよい附中をつくっていこうという意識を高める。

附小児童の目標

来年ともに生活する先輩との出会いを通して、今の自分を見つめ、新しい生活への意識を高めることができる。

3. 日時　　１１月１３日（火）
4. 場所　　附属中学校体育館
5. 音楽交流会の次第

進行　附中生徒

1. 開会のことば　（　　）
2. 中学校　合唱コンクール優秀クラスの発表「時の旅人２－１」
指揮（　渡部　知哉　）　伴奏（　鈴木　愛依　）
3. 中学生の合唱発表「信じる」
指揮（　金澤　杏佳　）　伴奏（　櫻井　萌果　）
4. ともに歌おう　「翼をください」
「変わらないもの」
5. 感想発表　（小：大瀧　皓子　　中：　　）
6. 閉会のことば　（　　）

6. 当日の動き

１３：１５～	附小生	附中体育館に移動
１３：２０	附中生	六稜ホールで合唱練習（２０分ほど）
	附小生	体育館で合唱練習
１３：４０	附中生	体育館へ移動
１３：５０	開会	
１４：２０	閉会	附小生、小学校へ移動

7. その他
児童下足用シートを昇降口に準備

※今年度は、インフルエンザ感染予防のため、計画のみで実施しなかった。

特別支援学校小学部との交流会

１　ねらい　　（幼）　・特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみをもつようになる。

２　日時・場所（１）平成３０年６月２７日（水）２８日（木）２９日（金）　附属幼稚園園庭
（２）平成３０年１１月７日（水）８日（木）９日（金）附属幼稚園園庭
※　平成３１年１月２９日（火）年少児が附属特別支援学校を訪問する予定であったが、インフルエンザ感染予防のため中止

３　参加者　　附属幼稚園　全園児　全教員
附属特別支援学校小学部１・２組　６名　児玉教諭、小形教諭、清野教諭
特別支援コーディネータ　髙橋教諭

４　内容　　・自ら選んだ活動で、特別支援学校小学部１・２組の児童や先生と園児が一緒に遊ぶ。

「車で運ぼうよ」

「お鍋に水をくむよ」

「行ってきま～す！」

「見てみて、
こんなにいっぱいになったよ」

５　まとめ

今年度も３日間連続の交流を春と秋の２回実施した。昨年度も交流を体験している幼稚園年中長児や支援学校小学部２年の子ども達が、昨年の体験を呼び起こしながら園庭で気に入った場所で遊んだり、友達との関わりを楽しんだりする様子から、交流を継続する意義を感じることができる。今年度は、昨年度に続き年少児が特別支援学校を訪ね、室内での遊びを通しての交流を計画していたが、インフルエンザ感染を防ぐため中止となり非常に残念であった。しかし、今年度はお互いの製作物を展示する作品交流も行い、また新たな形で友達の存在を感じる体験をすることができた。

附属幼稚園との交流及び共同学習

１　ねらい

（１）自然の素材や様々な遊具で遊んだり、附属幼稚園の友達や教師と同じ場で遊んだりすることを通して、友達と一緒に遊ぶことや遊びの持つ楽しさ、面白さに気付く。

（２）友達や教師と遊びながら、気に入った遊具や遊びを見つけたり、選んだり、伝えたりする。

（３）自然の素材や様々な遊具などで遊ぶ楽しさや友達と一緒に活動する楽しさを感じ、自分から進んで遊ぶ。

２　参加児童

附属特別支援学校　小学部１組児童　６名、附属幼稚園園児

３　日程、場所、主な活動内容

	日時　時間	場所	内容
１回目	６月２７日（水） １０：００～１１：１０	附属幼稚園	「ようちえんにあそびにいこう①～③」 ・附属幼稚園に行き、園庭の遊具や砂場で、幼稚園の友達と一緒に自由遊びを行った。雨天時は、遊戯室や教室で遊んだ。
２回目	６月２８日（木） １０：００～１１：１０		
３回目	６月２９日　(金) １０：００～１１：１０		
４回目	１１月　７日（水） １０：００～１１：１０		「ようちえんにあそびにいこう④～⑥」 ・附属幼稚園に行き、園庭の遊具や砂場で自由遊びを行った。
５回目	１１月　８日（木） １０：００～１１：１０		
６回目	１１月　９日（金） １０：００～１１：１０		
７回目	１月２９日（火） １０：５５～１１：４５ インフルエンザのため中止	附属特別支援学校	「ようちえんのともだちとあそぼう⑦」 ・附属特別支援学校の体育館やプレイルームで、お正月の遊びを行う予定だった。
事前事後の学習	・　附属特別支援学校では、１回目から６回目までは、事前の学習として毎回附属幼稚園の園庭で園児たちが遊ぶ様子を写真で見ながら活動の流れを確認した。 ・　附属幼稚園では、事前に附属特別支援学校の児童が来園することや活動内容について、園児に伝えた。 ・　附属特別支援学校では、交流及び共同学習の後に毎回、写真を元に活動を振り返りながら、楽しかったことをまとめた。		

４　まとめ

今年度は、３日間連続の交流及び共同学習を附属幼稚園で６月と１１月に実施した後、１月に附属特別支援学校において１回実施する予定だったが、インフルエンザにより中止となった。今回は、園庭での遊具遊びの他に、水遊びや泥遊び、遊戯室での遊びなど、いろいろな活動を楽しみながら交流することができた。児童たちは、回数を重ねるごとに、園児が遊ぶ様子をじっと見たり、園児の遊びをまねたり、玩具を貸し借りしたり、園児の様子に関心を示しながら夢中になって遊ぶようになった。また、簡単な言葉を交わしたり、継続して同じ友達と遊んだりするなど、自然に関わりながら遊ぶ姿も次第に見られるようになった。学校に戻ってからは、活動を思い出して「幼稚園、楽しかった。」と教師に伝えたり、幼稚園で遊んだことを再現する児童もおり、よい経験の拡大の場となった。

特別支援学校バザー交流会

1　ねらい　（幼）・買い物を通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。
・いろいろな製品の中から 100 円以内で自分の買いたい物を選んで買う。
・バスの乗降の仕方などを知る。

2　日時・場所　平成３０年１１月２２日（木）　山形大学小白川キャンパス

3　参加者　年中児　りんご組　３４名　引率：那須、金山、髙橋特支コーディネータ

4　内容　特別支援学校スクールバスを利用して行き来し、一人 100 円以内でバザー商品を購入した。（全附連Ｐ連カンガルー助成金より）

5　まとめ

ほとんどの子どもが、自分で財布を持ち実際に買い物をする経験は初めてであり、バスに乗りバザーに出かけること、本物のお金で買い物をすることを大変心待ちにしていた。一人１００円の予算であることを支援学校にお伝えし、子ども達が買い物しやすい手頃な価格の商品など配慮していただいた。いくつかの商品を組み合わせたり、家族のお土産にしたりと、１００円の予算を上手に使い切り、子ども達は大満足な様子であった。

日常の「お店屋さんごっこ」の遊びの中では、「これ、ください！」「〇円ですよ」と元気にやり取りをする子ども達だが、いざ本物の買い物体験となると気恥ずかしそうな様子であった。支援学校のお兄さん、お姉さん、先生方に親切な応対をしていただいたおかげで、子ども達にとって貴重な体験となった。

附属幼稚園と附属特別支援学校との交流

1　ねらい・日時・場所・主な活動内容

（1）ハートバザーでの交流

ねらい	①作業と社会とのつながりを理解し、そのつながりを意識しながら、仲間と協力しながら販売活動に取り組む。 ②周りの状況を見て考えたり自分の役割に工夫して取り組んだりしながら、販売活動に取り組む。 ③買い手に喜んでもらいたいという思いや、やりがいや責任感を持って、販売に取り組もうとする。
日時	平成３０年１１月２２日（木）
場所	山形大学小白川キャンパス　大学会館
参加者	附属幼稚園　年中組　　３４名　　附属特別支援学校高等部生徒　　２１名
内容	・高等部の生徒が山形大学小白川キャンパスでハートバザーを実施した。幼稚園園児は予算内で好きなものを選びながら買い物をした。それに応じて高等部生徒は園児一人一人からお金を受け取り、会計や袋詰め、製品の手渡しなどを行った。

（2）木工製品のメンテナンス交流　　※　計画案

ねらい	①附属幼稚園にある作業製品の修理や調整などのメンテナンスを行う。 ②製品がどのように使われているか実際に確認することで、働くことの喜びや大切さを知り、作業への意欲向上につなげる。
日時	平成３１年２月４日（月）
場所	山形大学附属幼稚園　遊戯室
参加者	附属幼稚園全園児　附属特別支援学校高等部生徒　２名
内容	※　今年度はインフルエンザ感染予防のため実施しなかった。

2　まとめ

ハートバザーは、特別支援学校高等部が毎年行っている小白川キャンパスに園児が訪問し交流を行った。交流前の作業学習では、園児はどんなものがほしいのか、どんなものを買ってくれるのか、などを製品グループごとに考え、話し合った。価格なども園児に合わせた設定となるよう工夫する姿が見られた。

当日は、高等部生が製品の説明を行い、園児が気に入たものを選んで購入していた。園児は気に入ったものや、興味のあるものを手に取りじっくりと選ぶ姿が見られた。高等部生にとっても金額を計算したり、製品のやり取りをしたりすることで、いろいろな人とのかかわりが持つことができ、大変有意義な交流となった。

木工製品のメンテナンス交流については、今年度インフルエンザ感染予防ため行わなかった。

附属小学校との交流及び共同学習

１　ねらい

（１）　附属小学校のペアの児童と一緒に活動したり、気持ちを伝えながら活動したりする楽しさが分かる。

（２）　附属小学校のペアの児童と気持ちや考えを伝え合いながら、一緒に遊ぶ。

（３）　自分からペアの児童にかかわりながら、喜んで活動しようとする。

２　参加児童

附属特別支援学校　小学部児童１８名　附属小学校　３，４年複組１２名

３　日程、場所、主な活動内容

	日時　時間	場所	内容
１回目	５月１７日（木） １０：３０～ １１：３０	附属特別支援学校	「ともだちをしろう①」 ・　ペアの友達との顔合わせを行い、プレイルームや体育館でペアの友達と自由遊びを行った。
２回目	７月　６日（金） １０：３０～ １１：３０	附属特別支援学校	「ともだちをしろう②」 ・　教室で附属小学校の児童が準備した歌を聞いたりゲームをしたりしたあと、プレイルームや体育館でペアの友達と自由遊びを行った。
３回目	９月２７日　(木) １０：３０～ １１：３０	附属特別支援学校	「ともだちとなかよくなろう①」 ・　教室で附属小学校の児童が準備した手作り玩具やゲームで遊んだあと、体育館やプレイルームでペアの友達と自由遊びを行った。
４回目	１１月２０日（火） １０：３０～ １３：５０	附属特別支援学校	「ともだちとなかよくなろう②」 ・　教室で附属小学校の児童が準備した手作り玩具やゲームで遊んだあと、ペアの友達に気持ちや考え等を伝え合いながら、体育館やプレイルームで一緒に遊んだ。附属特別支援学校で学習している活動に一緒に取り組んだ学級もあった。 ・　給食を一緒に食べながら、コミュニケーションを深めた。
５回目	１月２４日（水） １０：３０～ １３：４０	附属特別支援学校	「ともだちとなかよくなろう③」 ・　教室で附属小学校の児童が準備した手作り玩具やゲームで遊んだ。その後、ペアの友達と気持ちを伝え合いながら、体育館やプレイルームで附属特別支援学校の児童が学習しているお正月の遊びで一緒に遊んだり、各学級で一緒に弁当を食べたりした。 ・　附属小学校児童から歌のプレゼントがあった。
間接交流の学習	・　それぞれの交流及び共同学習の後に、感想の手紙をお互いに作成し、送った。		
事前事後の学習	・　附属特別支援学校では、事前の学習として、学級ごとに附属小学校の友達や前回の活動の写真を見る事前学習を行った。また、学級ごとに感想の手紙を書く事後学習を行った。 ・　附属小学校では、事前の学習として交流の学習でのねらいを確認したり、交流で使う玩具を作ったりする事前学習を行った。また、交流の学習を振り返る事後学習を行った。		

４　まとめ

今年度の交流及び共同学習では、附属小学校の児童の発想を生かした活動と、附属特別支援学校の児童が普段経験したことのある活動を組み合わせて交流及び共同学習を行うことができた。回を重ねる中で、附属特別支援学校の児童も、自分の気持ちや考えを伝えようとする姿が多くなり、互いに伝え合いながら活動する姿が見られるようになった。また、附属特別支援学校の児童が学習している内容を附属小学校の児童に紹介し、一緒に活動する中で、自分からペアの友達にかかわりながら活動する姿も多くみられた。

附属特別支援学校との交流【附属小学校】

1　ねらい

特別支援学校の児童とペアになって一緒に遊ぶ活動を通して、他者とよりよい関係を築こうとする姿勢を育む。

2　児童

附属小学校　３・４年複組児童　１２名　　附属特別支援学校　小学部　１８名　　計３０名

3　日程・場所・主な活動内容

	日時　時間	場所	内容
１回目	５月１７日（木） １０：３０～１１：３０	附属 特別支援学校	「お互いのペアについて知り、一緒に遊ぼう」 ・各教室で顔合わせ。 ・体育館やプレイルームでペアごとの自由遊び。
２回目	７月６日（金） １０：３０～１１：３０	附属 特別支援学校	「楽しいと感じる瞬間を増やせるように、一緒に遊ぼう」 ・体育館やプレイルームでペアごとの自由遊び。
３回目	９月２７日（木） １０：３０～１１：３０	附属 特別支援学校	「組ごとに遊びを考え、一緒に遊ぼう」 ・組ごとに考えた遊びで一緒に遊ぶ。 ・体育館やプレイルームでペアごとの自由遊び。
４回目	１１月２０日（火） １０：３０～１３：４０	附属 特別支援学校	「かかわり方を工夫して、一緒に遊ぼう」 ・組ごとに考えた遊びで一緒に遊ぶ。 ・体育館やプレイルームでペアごとの自由遊び。 ・組ごとに分かれて給食交流。
５回目	１月２４日（木） １０：３０～１３：４０	附属 特別支援学校	「学んだことを生かして、一緒に遊ぼう」 ・体育館やプレイルームでペアごとの自由遊び。 ・組ごとに分かれて給食交流。 ・ありがとうの会において歌の発表などを行う。
間接交流の学習	○　ペアの友達について知ることができるように、３年生が４年生に、あるいは４年生同士で昨年度の友達の様子などについての情報を聞く時間を適宜設けた。 ○　毎回、交流学習後に、小学校児童の振り返りを特別支援学校に送った。また、特別支援学校児童から小学校児童へ感想の手紙をもらった。		
事前事後の学習	○　児童と一緒に毎回の交流学習のめあてをつくり、ペアの友達と一緒に楽しむために心がけることを考えてから交流に臨んだ。 ○　交流学習後に、振り返りを発表し合う時間を設け、成果と課題を明らかにしていった。 ○　１年間の思い出カードを作り最後の交流学習の際に、それぞれのペアの友達に渡した。 ○　ペアの友達のことがわかる冊子（ペアブック）を作り、次年度に引き継いだ。		

4　まとめ

事前学習において昨年度のペアブックを見たり、４年生に昨年度の様子を聞いたりして、第１回目の交流学習に臨んだ３年生だったが、ほとんどの３年児童は、第１回目の交流学習ではペアの友達への接し方や遊び方などへの戸惑いがみられた。３年Ａ児は、「Ｙさんが他の（遊び）をやりたいのに、ぼくが聞き取れなくて、ぼくのせいで１回しか遊べなくて、やだったんじゃないのかな、と思いました。でも、Ｙさんはそれを言葉にしていなくて、（ぼくが）それに気づけなくて、それがぼくのやり残したことです。」と振り返った。「〇〇したい。」と言葉で表現されないと、相手の思いを分かることができず、どう行動すればいいのか悩む場面もみられた。しかし、２回、３回と交流を重ねていくうちに表情や動き、発した言葉などの、自分のペアのちょっとした変化に気付くようになった。その変化に気付くことができたこと、そして、一緒に遊んだことで相手が楽しそうにする姿があったことに対して、喜びを感じていた。学校で手話の本を見たり、もう一度ペアブックを見直したりする子ども達の様子からは、ペアの友達についてより理解したいと願っていることが伺えた。これは、相手とよりよい関係を築こうという姿勢の現れでもあると捉えた。

４年Ｂ児が２年間の交流学習を振り返り「人生につかえそうなことは、やっぱりどんな人でも、同じ人間なので、仲間はずれにしちゃいけないし、何事も、全て手伝わないで『手伝って』と言われたら手伝うなどといったことをやっていけたらなと感じました。（中略）もし、障がいのある人がいたら、今回までの経験をいかして、助けてあげたいと思いました。」と自分の考えを書いた。インクルーシブ教育の重要性がうたわれている今日だが、特別支援学校の友達と直接かかわったからこそ、実感を伴って温かくかつ公平・公正に人と接することの大切さを学ぶことができたと考える。

附属中学校との交流及び共同学習

１．活動名「世界の音楽に親しもう、一緒に歌おう」
２．活動のねらい
（１）附属中学校の生徒と一緒に活動することや活動内容が分かる。
（２）附属中学校の生徒と音楽の授業を通して、歌声の美しさや豊かな響きを感じ、それを表情や身体などで表現しながら活動する。
（３）同年代の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、相手に関心を持ったり自分からかかわろうとしたりする。

３．日　時
平成３０年１１月２６日（月）　　１３：３５～１４：２５
平成３０年１２月１１日（火）　　１０：５０～１１：４０
４．場　所
附属中学校　六稜ホール
５．参加生徒
附属特別支援学校中学部　　附属中学校１年１組、１年３組
６．活動内容

学習活動	具体的な動き	備　考
１はじめのあいさつ	※最初の進行は附中で。	・隊形は、ステージをはさんで対面。附特…北側、附中…南側。
２学校紹介 ①特支（10 分） 「学習の紹介」 ②附中（10 分）	・各校で進行する。 特支…あいさつ、クラスごとに学習の様子を紹介する。 附中…合唱コンクール自由曲、あいさつ等	
３世界の音楽に親しもう 「マカレナ」 （10 分）	・特支で進行（渡辺） ①隊形を変更 ②自己紹介 ③特支の生徒と教師代表の手本 ④みんなでマカレナを踊る	・附中生と特支生で７班に編成し、同じ班の人と簡単に自己紹介をする時間を設ける。 ・隊形は、附中生と特支生が交互になるように、二重の輪になる。
４一緒に歌おう 「マイバラード」 （7 分）	・指揮は附中（渋谷Ｔ）、ピアノは附中（生徒）で。時間を見て１～２回歌う。	・隊形は、附中生と特支生が交互になるように、一つの輪になる。
５感想発表（5 分）	・各校３～４人から発表してもらう。	
６おわりのあいさつ	・特支２年生の当番があいさつする。	

７．まとめ

今年度は附属中学校で交流および共同学習を２回行った。附属特別支援学校の生徒は、毎年行っているため見通しを持ち、当日を楽しみに迎えた。

一緒に活動する場面では、附属特別支援学校の音楽で取り組んでいる表現や歌を中心に行った。７グループに分かれて自己紹介を行い、その後一緒に「マカレナ」を楽しんだ。明るくリズミカルな曲であり、ダンスも繰り返しが多いことから、お互いに向かい合ったり、手をつないで輪になったり笑顔で踊りを楽しむ姿が見られた。合唱「マイバラード」では、全員で同じパートを歌うことで声量が増し、ホールいっぱいに歌声が響き渡った。

相手を理解することや同年代の友達とかかわること、見通しが持ちやすい活動であること、また２回の交流を通してより楽しく活動できたことなどを考慮すると良い点が多く、今後も継続して続け、深めていくことが望ましいと考えている。

Ⅱ　山形大学附属学校
研究・連携推進委員会規程

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

(平成 28 年 4 月 1 日制定)

(設置)

第 1 条　山形大学附属学校運営規程第 8 条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として，山形大学附属学校研究・連携推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第 2 条　委員会は，附属学校における研究を推進し，かつ，附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第 3 条　委員会は，次に掲げる事項を審議する。

(1)　大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項

(2)　公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項

(3)　附属学校間の連携の基本的方針に関する事項

(4)　附属学校合同研修会に関する事項

(5)　幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項

(6)　その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第 4 条　委員会は，次に掲げる委員で組織する。

(1)　附属学校運営部長

(2)　附属学校運営副部長(研究担当)

(3)　附属学校運営副部長(教育実習担当)

(4)　主担当教員として地域教育文化学部に配置された教員の中から選出された者　3 人

(5)　主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者　1 人

(6)　附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)

(7)　附属学校の教頭

(8)　各附属学校研究部長

(9)　その他委員会が必要と認める者

2　前項の第 4 号，第 5 号及び第 9 号に掲げる委員の任期は，2 年とする。ただし，委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条　委員会に委員長を置き，前条第 1 項第 1 号に掲げる委員をもって充てる。

2　委員長は会務を掌理し，委員会を代表する。

3　委員長に事故があるときには，前条第 1 項第 2 号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

第 6 条　委員会は，委員長が招集する。

2　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，会議を開き，議決することができない。

3　委員会の議事は，会議に出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，委員長の決するところによる。

4　前項の場合において，委員長は，委員として議決に加わることができない。

5　委員長は，審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

第 7 条　委員会の下に，次の 3 つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は，別に定める。

(1)　共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し，実施する。

(2)　幼・小・中連携部会

附属幼稚園，附属小学校及び附属中学校の連携について計画し，実施する。

(3)　特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し，実施する。

(事務局)

第 8 条　委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し，委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

第 9 条　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

附　則

1　この規程は，平成 28 年 4 月 1 日から施行する。

2　次の規則は，廃止する。

(1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成 17 年 3 月 7 日制定)

(2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成 21 年 6 月 1 日制定)

Ⅲ　資　　料

共同研究推進部会申し合わせ

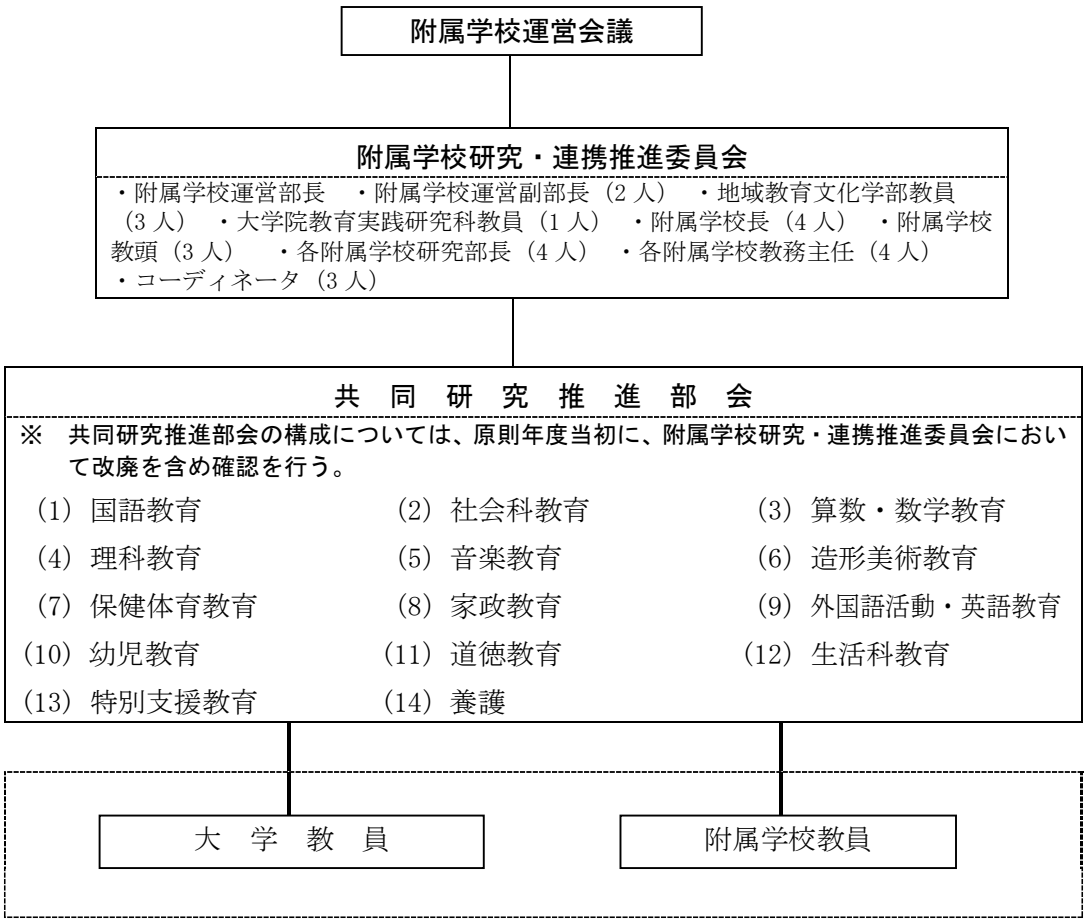
１．目的

附属学校の重要な使命の一つとして、教育理論及びその実践に関する研究並びにそれらの実証と研究成果の地域への還元がある。これまで、附属学校は、大学と連携して附属学校研究推進委員会を設置し、その下に大学・附属学校共同研究部会を組織し、共同研究を推進してきた。

附属学校の存在意義が問われている状況の中で、平成 21 年度に附属学校研究推進委員会規則の改正を行い、大学との共同研究の更なる実質的な推進を図ってきた。

さらに，平成 28 年度には、共同研究活動及び連携活動の改善に向け、附属学校研究推進委員会及び附属学校連携委員会の２つの委員会を統合し、附属学校研究・連携推進委員会を設置した。

２．大学・附属学校共同研究組織



３．共同研究推進部会

(1) 共同研究推進部会は、大学教員及び附属学校教員で構成する。

(2) 共同研究推進部会への所属の確認作業は、原則年度初めに附属学校研究・連携推進委員会を通して行う。所属確認は附属学校の教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

なお、地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの共同研究推進部会に積極的に所属するものとする。附属学校の教員は原則いずれかの共同研究推進部会に所属するものとする。

(3) 地域教育文化学部以外の教員についても、共同研究推進部会員の推薦に基づいて共同研究推進部会に所属することができる。

(4) 各共同研究推進部会は２人以上で構成し、各研究推進部会に大学教員の中から選出した部会長

１人を置く。

(5) 共同研究推進部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。

(6) 各共同研究推進部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各共同研究推進部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。

４．公開研究会

共同研究推進部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

（平成30年4月1日現在）

	氏　　名	現　　職
委員長（1号委員）	藤　田　洋　治	（附属学校運営部長）
委　員（2号委員）	鈴　木　　亨	（附属学校運営副部長）
委　員（3号委員）	三　浦　登志一	（附属学校運営副部長）
委　員（4号委員）	佐　川　　馨	（地域教育文化学部教授）
	野　口　　徹	（地域教育文化学部准教授）
	鈴　木　宏　昭	（地域教育文化学部准教授）
委　員（5号委員）	森　田　智　幸	（大学院教育実践研究科准教授）
委　員（6号委員）	村　上　ゆかり	（附属幼稚園長）
	佐　藤　昌　彦	（附属小学校長）
	小　関　広　明	（附属中学校長）
	髙　橋　幹　則	（附属特別支援学校長）
委　員（7号委員）	髙　橋　　浩	（附属小学校教頭）
	早　坂　　智	（附属中学校教頭）
	村　上　未　紀	（附属特別支援学校教頭）
委　員（8号委員）	倉　岡　寿　幸	（附属幼稚園研究主任）
	早　坂　和　重	（附属小学校研究部長）
	髙　嶋　裕　也	（附属中学校研究部長）
	近　藤　真知子	（附属特別支援学校研究主任）
委　員（9号委員）	片　山　敬　子	（附属幼稚園教務主任）
	渡　邊　弘　晶	（附属小学校教務主任）
	関　東　朋　之	（附属中学校教務主任）
	片　桐　　睦	（附属特別支援学校教務主任）
	髙　橋　僚　子	（特別支援教育コーディネータ）
	土　門　直　子	（メンタルケアコーディネータ）
	佐　藤　大　将	（英語教育コーディネータ）

※4号，5号及び9号委員の任期は2年（H30.04.01～H32.03.31）

編集後記

大学と附属学校との共同研究・連携活動の更なる充実を目的とし、「附属学校研究・連携推進委員会」が組織されて３年目となる。

全国的には「教員の働き方改革」や「附属学校園のあり方」等について議論がなされており、状況を見極めつつ対応を図ることが必要である。

そのような中、今年度の活動を振り返ってみると、いずれの活動も附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校の四校園に学ぶ幼児・児童・生徒がそれぞれの良さをいかしながら、お互いに高め合う連携が行われたことが伺える。

３年目を終える今、これまでの活動内容を踏まえつつも、さらによりよい連携のあり方を目指し取り組んでいかなければならない。

平成３０年度　附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属中学校　教頭　早坂　智

平成３０年度
附属学校連携活動報告書

発行日　平成３１年２月２８日

発行者　山形大学

編集者　山形大学附属学校研究・連携推進委員会
〒 990-0023　山形市松波 2 丁目 7 番 2 号